

地域ビジョンに思う



立命館大学 総合理工学研究機構

特任教授 山田 淳

Kiyoshi Yamada

水道事業について地域の水道ビジョンが作られ始めてかなり経つ。最近では下水道事業のビジョンもつくられている。これらのビジョンづくりのお手伝いをする機会を得て感じることもある。「ビジョン」というと、「夢」、「構想・展望」というイメージが強いが、実際は、国の指針もあって、「基本計画」にもとづく「実施計画」といった色合いが強い。20年程度先を対象とした「基本計画」と5ヶ年計画など財政計画を見定めた「実施計画」の間をめざしたものといえよう。しかし、でき上がったビジョンは様々で、「基本計画」的な内容をもつものから、現状延長型で、すでに方向の決まっている施策を組み込んだ「実施計画」に限定したものまであり、ビジョンのなかで、これから「ビジョン」や「実施計画」を考えていくという先延しビジョンまで出てきている。一方、「夢」や「構想・展望」を取り上げている例は少ない。これでは、将来を展望した施策を論じることはできない。

先日、アメリカのロスアンゼルス市電力・水道局を訪問し「ビジョン」について聞いた。市では、2035年を目標年度としてこの夏にも長期計画を策定予定しており、水資源の確保と節水型社会の実現に向けた具体的な施策をロードマップとともに掲げている。人口増加の中で水需要の抑制を図ってきた実績をふまえ、さらに新しい施策を組み込んだものとなっている。水資源の確保は、ダム開発より、再利用、地下水涵養、雨水利用など多くの代替案をコスト比較しながら実施するとしており、節水型社会の実現では、使用用途・目的毎にその手法を示している。これらの施策によって現在の水利権の一部を余裕水量にまわすことまで考えている。また、中国での1980年代の経験であるが、文化革命の後遺症のリハビリに力を注いでいた時期にも関わらず、2000年代以降の長期目標設定をめぐる議論したことを覚えている。

日本の地域ビジョンにおいても、作成の段階では、市民や専門家から様々な意見が出され、その中には「構想・展望」や「基本計画」に相当する提案も少なくない。しかし、現在合意されている10年先の方針からはずれるものはあまり採用されない。とくに、隣接都市や広域連繋や、国際化についての内容に乏しい。本来、このような「構想・展望」や「基本計画」を論じた上でビジョンをつくるのが、折角参加している市民や専門家委員の叡智を活かすことにもなる。実際は、ちょっと遠慮して、ビジョンのあと書きに加えていただいているのが現状である。

3月に発生した福島原発事故をみて、「ビジョン」のないビジョンをつくっていることの限界を感じている。